【右】将棋盤に向かうと背筋がすっと伸び、周囲の空気もピンと張り詰めた。「背筋を伸ばさないと頭が働かないんです」
【左】天童市内で開催された「将棋の日」イベントでは、5面指しの指導対局も。イベントの指導でも「こなすのではなく、どうしたらより良くなるかを常に考えて指しています」。対局の後は一人一人と丁寧に感想戦

阿部健治郎（あべ・けんじろう）＝1989年酒田市生まれ。6歳から故土岐田勝弘アマ八段の将棋道場で本格的に将棋を始める。中1の時に全国大会で準優勝し、「もっと強い人と指したい」とプロを志望。2002年、日本将棋連盟のプロ棋士養成機関である奨励会に入会。09年には「1年に4人だけ」という狭き門をくぐり抜け四段昇段。10年「新人王戦」優勝。15年名局賞特別賞受賞。竜王戦1組、順位戦C級1組。酒田市在住。

年で6級から三段にまで上がった。「高校卒業を待って上京し、20歳で四段、つまりプロの棋士になった。

阿部七段の将棋についてほかの棋士は「序盤の研究家。独自の研究で新しい手を指してくる」と評する。その独創性、創造性に一目置かれる存在なのだ。本人はそれを「必然的にそうなった」と説明する。「地方にいると一人で考えるしかない。他の棋士と交流しやすい環境にいる人たちに勝つには、独創性が必要だったんです」

阿部七段の独特の棋風の土台には、酒田と東京の距離が生み出した、長い孤独な時間があった。

2019年はプロ10年目、30代を迎える年でもある。「昨年、故郷へと居を移したのは『東京にいた間に、自分の望む結果を出せなかったからだ』『タイトルを取らないまでも、もっと上に行きたかった』という阿部七段が目指すのは勝率7割。現在でも6割前後と高い勝率だが、『もっと活躍しなきゃいけません』と、真剣で語る。勝つために、思い切って環境も変える。トップアスリートながらのストイックさで、勝負の世界を生きている。

将棋界には竜王戦、名人戦など八つのタイトル戦がある。しかしいまだ、タイトルホルダーと挑戦者が対峙する番勝負の晴れ舞台に、山形県出身の棋士が登場したことはない。可能性があるからこその期待を力にして、阿部七段の新しい一年が始まる。

過去に数々の名勝負が繰り広げられてきた、天童温泉 ほほえみの宿 滝の湯の「竜王の間」。撮影のために並べた駒は、横歩取りの終盤の局面

YAMABITO
山形の人をめぐるストーリー

孤独を味方につけて。

県内唯一の将棋プロ棋士　阿部 健治郎七段（酒田市）

昨年11月下旬、天童市で開かれた将棋イベントに、総勢19人の棋士・女流棋士が集まった。ほとんどが東京や関西方面から来る中、その棋士は酒田から電車を乗り継ぎ、天童駅に降り立った。

阿部健治郎七段（29）。約160人の現役プロ棋士で唯一の山形県出身者だ。古里・酒田市に住み、東京や大阪で行われる対局に通う。将棋普及にも熱心で、指導や解説、トークショーに呼ばれれば県内外に出向く。この秋は「ちょっと異常」と苦笑するほど多忙を極めていたが、この日のイベントでは疲れも見せず、指導対局やファンとの交流に真摯に向き合う姿があった。

阿部七段と将棋との出会いは四、五歳の頃。外遊びのできない冬、父と兄が指す様子を傍らで見て、数日でルールを把握した。1年もすると父に勝つようになり、兄と一緒に地元の将棋道場の門をたたく。プロ棋士養成機関である奨励会に入会したのは、中学2年生の時だ。

月に2度、酒田から東京へ。対局を終えると寝台列車に揺られ、酒田着は朝5時。それから中学、高校へ通った。行きの電車は、所要時間約4時間半・朝9時に千駄ヶ谷の将棋会館に入るため前泊するのだが、冬は電車のトラブルに備え、前日早朝にたつこともあった。朝6時に出たのに吹雪で特急列車が止まって、着いたら夜11時だったこともありましたね（笑）。帰りの電車の終点は青森。気を付けていたものの寝過ごして、秋田・象潟まで行ってしまったこともある。

そんな過酷な環境でも、入会からわずか3

imatto
山形って、いいよね。
2019.1.10
31
街の「今」を伝える情報紙

YAMABITO
孤独を味方につけて。
県内唯一の将棋プロ棋士
阿部 健治郎七段（酒田市）

index
冬のあったか
もこもこもの
パッとプロの味『神町いちご』
imattoeyes『県ホープス選抜卓球選手権』
ハイパーサーミア市民講座／やまがたeお店
エンタメinfo／イベント／プレゼント

山形新聞